あぁ、懐かしの友よ

RAB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あぁ、懐かしの友よ

【Ｎコード】
Ｎ８８１２Ｓ

【作者名】
ＲＡＢ

【あらすじ】
本因坊秀策の幼馴染だった少年「大河」が前世の記憶を持ったままなんとヒカルのクラスメイトに転生！？
佐為が取り憑いてからのヒカルの棋力などに過去の幼馴染の影を見つけた大河は……

＊注意書き（前書き）

とても珍しい設定ですが、精一杯がんばるので感想などぜひ書いて下さったら嬉しいです☆

＊注意書き

ここのオリ主の設定はとっても独創的です。

こんな主人公なんか嫌っっ！

というような方は申し訳ございませんがお引き取りください。
残って下さっている方々が楽しんでいただけるようにがんばりたいと思います（，　▽　、　）ノ

主人公設定←←

加賀　　大河

歳　　現在↓ヒカルと同い年
　　前世↓秀策と同い年

性格　　荒くれ者……

備考　　碁の腕前はプロ上段者級。　しかし、前世で秀策に取り憑いていた佐為により圧倒的な差を感じさせられ、それ以来あまりやらなくなった。秀策とは佐為が秀策に取り憑くまではとても良いライバルだった。が、佐為が取り憑いた秀策に負けてからいきなり強くなった秀策に不信感を若干抱いている。ヒカルにも同じようなものを感じている。加賀の弟である。

プロローグ（前書き）

うわぁー……
ついに始めちゃいましたよ（＾人＾）
ヒカ碁連載！！

プロローグ

バチッ　ビシッ　バチッ……

二人の少年が囲碁を打っていた。

ビシッ　バチッ……

「……ありません…」

「「ありがとうございました。」」

「虎次郎……お前どーしてこんなにいきなり強くなった？昨日までのお前と違いすぎる！しかも棋風まで変わってんじゃねーかっっ！？いってぇどーいうことだよ！？」

負けた方の少年が勝った方の少年に怒鳴りつける。

「……ごめん。大河……もうキミとは打てない……」

勝った方の少年は、悲しそうな顔で謝る。

「ごめんって何だよ！？打てないって！？オレ達好敵手だったんじゃねーか？お互いに高め合って、碁打ちを目指そうって言ってたじゃねーか！？」

「ごめん……ごめんね、大河……」

「……もういい。オレはもうお前の好敵手にはなれねぇんだな。……オレは碁打ちになんねぇ。お前一人でなってろ。」

「なんで！？キミだって碁打ちになりたかったんだろ！？目指せばいいじゃないか！」

勝った方の少年、虎次郎は慌てたように言う。

「オレが碁打ちになりたかったのは、お前と打つ碁が面白かったからだ。もうオレにとって碁打ちなんて意味ねぇんだよ。」

そう言って負けた方の少年、大河は席を立った。

「大河……」

バッッ……

「……夢か……ずいぶんと遠い昔の夢だな……」

辺りを見渡すとそこは”現代”の自分の部屋だ。外を見ると、もう夕方になっているということにオレはとても驚いた。少し小腹がすいたのでリビングに行くと、そこには今日将棋部の部長なのに何故か囲碁の大会に出た兄貴がいた。

「お、大河じゃねーか。やっと起きたのかよ。もう夕方だぜ？」

「自分でもビックリだっつーの。兄貴こそ今日の大会どーだったんだよ？」

兄貴はその問いを待ってたかのように笑顔で話だした。

「それがなー、優勝したんだが、こっちの三将が小学生ってことがバレて失格。おしかったんだがなぁー。」

オレが小学生？って顔をしたことに気づいた兄貴がそのことについて話しだした。

「人数が足りなかったからさ、出てもらったんだよ。そいつの強さが謎なんだわ。いきなり強くなったり、弱くなったり。」

「いきなり……？？」

オレはそのことに何か引っかかりを持った。

「おぅ。たしかお前と同い年のヤツだぜ。進藤　ヒカルっていう名前でな。」

「進藤　ヒカル！？」

「おっ！？知ってんのか？」

進藤　ヒカルの名前に反応したオレに兄貴は驚いて聞いてきた。

「知ってるもなにも、クラスメイトだぜ。しかもあいつ最近囲碁教

室に通い始めたばっかみたいだし、大会に出れる程の力なんてないはずなんだけど??」

「どーいうことだよ?あいつの決勝での棋力なんてプロ並だったぜ?最近始めたとかじゃありえないだろ??」

「兄貴、その対局並べてくれない?」

「あぁ。」

兄貴はオレが持ってきた碁盤に例の対局を並べてくれた。美しい黒と白の石の並び。しかし、オレには何か見覚えのあるその棋風……

……

「虎次郎……??」

オレは誰にも聞こえない声でそっとつぶやいた。

プロローグ（後書き）

秀策の口調わからんわー……

あと、加賀の口調もなんかおかしい……

アドバイスよろしくお願いします！！

1　懐かしの「碁」？（前書き）

佐為の言葉ですがオリ主には聞こえません。
『』を使っている物も聞こえてませんので、注意してください！！

1　懐かしの「碁」？

あの棋風は虎次郎と全く同じである。

オレはこのことは断言できる。しかし、ありえないだろう。この時代にあいつと同じ棋風のヤツがいるなんて……。たしかに虎次郎……いや、本因坊秀策はこの時代でも有名で、たくさんの棋譜が現代にも残っている。しかし現代では新しい定石などができ、その結果、本因坊秀策の棋譜によりたくさんのことを学んだとしてもあそこまで一緒の棋風になるわけが無いのだ。なのに、あいつ「進藤　ヒカル」は、同一人物が打ったとしか思えないような碁を打った。

「これは本人に聞くしかないな。……いや、あやしまれるか？いきなりお前何故ここまで本因坊秀策と同じ棋風なんだ？なんて聞くのは……対局してみるか……？」

まぁ、とりあえず学校に行くか…と思いオレは家を出た。

学校に着くと、進藤　ヒカルはもう席に着いていた。オレは意を決して話しかけてみることにした。

「なぁ進藤、お前囲碁強くなったんだって？兄貴から聞いたぜ。昨

日の大会あと少しで優勝だったんだってな？」

「え？？お前兄貴って……もしかして加賀ってあの加賀の弟なのかよ！？へぇー気づかなかったなー。」

「たぶんその加賀の弟であってんよ。オレ実はちょっと碁打てんだよ。そんで、昨日の決勝の碁見せてもらってさ。一回お前と打ってみたくなったんだよ。だから、今日の放課後打たねぇか？」

そういうと、進藤は慌てだした。何やらボソボソと独り言を言い出した。そういえば虎次郎もいきなり強くなってからこんな感じになったよな……。なんか関係があんのか？？

『どーすんだよ？佐為！？加賀ってクラスメイトなんだぞ！？お前の力とかバレたらヤバくないか？？』

『大丈夫ですよ、ヒカル。指導碁を打てば……まぁ、塔矢ぐらいの腕でしたら、指導碁ということがバレるでしょうが、これぐらいの歳の者で塔矢ぐらいの腕の者なんてそうはいませんから。』

『……わかった。』

「今日の放課後だったら空いてるよ。でも何処で打つんだ？？」

独り言が終わった進藤はオレに話しかけてきた。小さな声過ぎて、独り言の内容は聞こえなかったが、誰かと話しているようだった。進藤は電波君なんか……？いやそしたら虎次郎も……？？

「あ、あぁそれだったらオレん家なんてどうだ？学校からなかなか近いし。」

「わかった。そんじゃ放課後な！」

それから授業を受け、やっとのことで放課後になった。

「進藤行くぜー！！」

「あっ待てよ、加賀！！」

オレ達は家に着くまでたわいない話とかで盛り上がった。もともとオレらはクラスでもなかなか話す方だったので会話には困らない。まぁ、男子というのは女子と違って、グループとかあまり作らないのだが。

「あっそういえば、家に兄貴いるかもしんないから、オレのこと「大河」って呼べよ。兄貴とごちゃになってまぎらわしいからよ。」

「そういやそーだな。わかったよ。」

『……大河……？？』

『どうしたんだよ、佐為？？なんかあったのか？』

……進藤はまた独り言を始めたようだ……

『いえ、知っている者に顔も名もそっくりだったもので……。気に

しないで下さい。』

『そりゃ凄えな……』

「進藤早く入れよ！！独り言なんて言ってねぇでさ！！」

「あっ、悪い悪い、今入るよ」

オレの声でようやく動きだした進藤はオレの部屋に入ってきた。オレの部屋ははっきり言って殺風景だ。必要最低限の物しか置いていない。まぁ、今日はそれプラス碁盤と碁石が昨日から出しっぱなしのため置いてあるが……そんなつまらない部屋を進藤はグルグルと見回している。

「何にもねぇな。碁盤と碁石ぐらいでさ。」

「まぁな。漫画とか兄貴の借りるし、別に困らねーよ。」

「そっかー……んじゃ始めるか？？」

「そーだな。」

オレと進藤が碁盤の前に座る。お互いに碁石を取り、蓋を開ける。中をみると、オレのには白石が入っていた。

「オレのに白石入ってたから、オレが握るぞ？」

「うん。」

オレが握った碁石の数は１４、進藤は２個黒石を置いていた。

「進藤が先手だな。コミは五目半でいいか？」

「うん。じゃ、始めよ。」

「「お願いします」」

1　懐かしの「碁」？（後書き）

先に言っておきますが、私に囲碁知識はございません！！

おかしな点など、どんどん指摘してください！

あと今後の展開など希望がある方は感想の所に書いて下さい。

できる限り取り入れますので。

2　懐かしの「碁」？（前書き）

感想ありがとうございました（，　▽、　）ノ

もう少し更新頑張りたいです（^人^）

2　懐かしの「碁」？

先手の進藤が黒石を置く。右上スミ小目だ。進藤の石の置き方はとても素人くさい……よくこんな打ち方であんな碁が打てるな……いや、やっぱり何かあるのか？そんなことを考えつつも、オレは次の一手を打った。すかさず、進藤も次の手を打つ。

パチッ　　バシッ　　ビシッ

みるみるうちに美しい棋譜が作られていく。いや、それだけではない。進藤はオレ相手に指導碁を打ってきた。そんなことは、まだ囲碁を始めたばかりの少年にできるはずがない。これは確実に何かがあるな……

バシッ

……　……秀策のコスミ…

進藤はそれを打ってきた。現代ではコミというものができ、使われなくなってきた「コスミ」を……

「……虎次郎……」

『！？っっ』

『どーしたんだよ、佐為？？』

『……少し気になることが……いえ、今はこの対局に集中しまし

ょう。』

対局はどんどん進んでいく。オレは進藤にこれ以上指導碁なんてさせないように真剣に打った。進藤の打つ手がだんだん厳しくなってくる。

ビシッ

……これ以上は打てない……

「ありません……」

「「ありがとうございました。」」

……負けた……しかし、この対局でわかったことがある。それは……

「なぁ、進藤。この碁、お前が打ってないだろ??」

「『!?』」

進藤は凄く驚いた様子でこちらを見てくる。

「なっ…何言ってんだよ??ここには、オレとお前しかいねぇじゃん!」

「どう考えたって、つい最近囲碁を始めたばかりの奴が打てるよーな碁じゃねーよ!!まだ幽霊とかに取り憑かれて打ってるとかの方が信じるっつーの!!」

「『！！？？』」

……えっ！？まじなんですか？その反応……

「あっ悪いー、そういえばオレ今日用事あるんだったわ。じゃーな！！」

「あっおい！！待てよ！逃げんなっっー！！」

そう叫んだときにはもう遅く、進藤は走って帰ってしまった……さすがに進藤の足には追いつけない……

「くっそーー！！絶対あいつの強さの秘密を暴いてやる！！」

オレの声は虚しく響いた……

ところ変わって、走り出した少年は……

『おいっ佐為！！お前のせーでバレかかったじゃねーか！！』

『すみません……あの者が思ったよりも強くて……というより、あの者、あの歳であの強さはいささかおかしいですね……塔矢アキラよりも強かったです。」

『え！？まじで？？大河ってそんなに強いのかよ！？』

『ええ……そしてあの碁……以前どこがで見た気がするのですが……』

『んなわけねーじゃん。それより明日からどうしよう……』

……一人で百面相をしていた……

2　懐かしの「碁」？（後書き）

あーーー

今後の展開どうしよう……

勢いではじめたからネタが……

何かアドバイスや感想お願いします（^O^）／

3　懐かしの「碁」？（前書き）

くわぁー……

話の続き考えるの難しい……

ヘルプです（＞人＜；）

3　懐かしの「碁」？

あれからオレは進藤に避けられている……同じクラスだから絶対に捕まえられるはずなのに、なぜかもう三日間も避けられているのだ。あいつはオレの気配でも読めるのか！？まさか本当に幽霊が取り憑いていて、進藤が逃げるのでも手伝っているのか？？

「こうなったら、意地でも捕まえてやるぜ！！」

オレは固くそう誓った。

今日は金曜日。今日を逃したら来週まで話が聞けない。だからオレは今まで以上に進藤を捕まえようとしたが捕まらない……ここは、方法を変えるべきだとオレは考えた。

オレは進藤の席からノートを一冊とっておいた。もちろん、誰にも見られないようにして。

今は帰りのＨＲが終わったところ。進藤は当たり前のごとく、ダッシュで教室から出ていった。

「なぁ、藤崎。お前進藤の家知ってるか？」

「え？知ってるわよ。でもそれがどうしたの？？」

藤崎はオレの質問に不思議そうに答えた。

「あぁ、それは進藤のやつ、オレにノート貸したまま帰っちまったんだよ。今週の宿題に必要なのにさ。だから返しに行こーと思ってな。」

「それなら私がヒカルに届けとこうか？私、ヒカルの家のお隣さんなの。」

「いや、いいよ。オレが借りたんだし。この後もとくに用事もないしな。」

「そう？じゃぁ、ヒカルの家までの地図書くからちょっと待ってね！」

……作戦成功……。進藤の家までの地図を手に入れたオレは、早速進藤の家に行くことにした。

「ここか、進藤の家は……」

ピーンポーン

呼び鈴の音が響く。するとすぐに進藤のお母さんと思われる人がインターフォンに出た。

「はい、進藤です。」

「あ、僕、ヒカル君のクラスメイトの加賀　大河です。ヒカル君に借りていたノートを返しに来ました。ヒカル君はいらっしゃいますか??」

オレは対大人用の猫をかぶって答えた。

「あら、わざわざごめんなさいね。でもヒカルまだ帰って来てないの。だから私が預かっときましょうか?」

あれ?進藤ってオレより先に学校出たよな?と思いつつ

「ありがとうございます。でも僕自身もヒカル君に用があるので、少し待っときます。」

と答えた。

「なら、部屋に上がって待っててくれる?たぶんすぐに帰って来ると思うから。」

「わかりました。」

進藤の部屋に入ると、碁盤どころか、囲碁関係の本なども見当たらなかった。あれ程の実力をこの短期間につけるにはそれ相応の努力が必要だろう。これでまた一つ不信な所を発見した。

待つこと15分ほど、下から「ただいま〜」という進藤の声が聞こえて来た。

「全くさ、大河のやつしつこいよなぁー。これも全部佐為のせいだ

からな！！」

進藤が独り言を言いながら階段を登ってくる。……てか、サイって誰だ？オレが色々考えているうちにガチャッと音をだしながらドアが開き進藤が部屋に入って来た。

「！！？？なんでお前がここにいるんだよ！？大河！！」

「このノートを届けに。てか、お前“サイ”って誰だよ？？」

そう言った瞬間、部屋はシーンと静かになった……。

3　懐かしの「碁」？（後書き）

皆さんに質問なんですが、大河ってプロ棋士になって欲しいですか？？

今悩み中なのです。ぜひ聞かせてほしいです！！

4　懐かしの「碁」？

素晴らしい程の沈黙が部屋に広がる。
というか、ヒカルは完璧冷や汗をかいている。
これはもう、自分で「何かあります！」って言っているのと同じだとオレは思う。

「……進藤……もうここまでバレちまってんだ。さっさと話した方が楽になるぜ？」

オレは進藤に笑顔で話しかける。
もちろん、逃がさねぇぜ！！
という意味を含めた笑顔だ。

『佐為！！どーすんだよ！？これは誤魔化しきれねぇぜ！！』

……また独り言だ。
これは本当に幽霊と話してんのかもな。

『……正直に話しましょう。』

『！？何言ってんだよ！！オレが頭おかしい奴って思われるじゃんっっ』

……何か焦っているような進藤。
一人で斜め後ろを見ながらだ。

「……もしかして、そこに誰かいんのか？」

「『！？』」

……いや、そんなに驚かれても……

これまでの行動を総合して見ると、一番妥当な線だし……

しかも、その驚き具合じゃ、肯定だな。

「あぁ、そこにいるのが、“サイ”って奴なんだな？」

オレがそう言うと、進藤は目に見えておろおろとし始めた。

ホント、おもしれぇな……

「そんなに、おろおろしなくても、別に誰にも話さねぇよ。ただ、一つ聞きてぇことがあんだ。」

進藤はおろおろしていたのをピタッとやめて、戸惑いがちにオレを見る。

「……聞きたいことって？」

「あー……進藤にじゃねぇよ。その取り憑いている幽霊にだ。」

『えっっ……私にですか！？』

進藤はまた斜め後ろを見る。

たぶん、どーするかを聞いているんだ。

『どーする、佐為？答えるか？』

『取り敢えずは、質問を聞いてみたしょう。出来る限り答えます。』

「……それで、何なんだ？」

進藤がオレを見ながら言う。

あぁ、ようやく、長年の謎が解き明かされるかもしれない……

「そのサイって奴……江戸時代に虎次郎に取り憑いていなかったか……？」

「『！？』」

『なっ……なぜそのことをこの者は知っているのか……？そして、この前の打ち筋……まさかっっ！？』

『どーしたんだよ、佐為！？何か心当たりがあったのか？』

……反応あり……

やっぱりこいつが虎次郎に関わってんだな……

『そんな……まさか……この時代になぜ、松原　大河が！？』

「松原　大河……？」

「！？」

ビンゴだっっ！

前世での名を知っているなんて進藤じゃありえない。

つまり、前世のオレと関わっていて、あの棋風……

やっと……たどり着けた……

「頼む！真実を教えてくれ！虎次郎のことから全て！！」

あの日、もうオレとは打てないと言った虎次郎……
オレはあの時、キレちまって、あの場を飛び出してしまった。
そしてそれから、虎次郎と打つことはなくなった……
オレは後悔してるのか？
いや、分からない……
でも、あんなにずっと一緒に碁を打ってきた虎次郎がいきなり、オレにあんなことを言った真実が本当はずっと知りたかったんだ……
……

『話ましょう、ヒカル……この者には聞く資格がある……』

『……分かった、話すよ。』

「これから話すことは本当のことだからな！疑ったりすんなよ！！」

そう言って、進藤はオレが知りたかった全てを話してくれた。

「……そうだったのか……でも、何で虎次郎は、オレに本当のことを話してくれなかったんだ？もし話してくれたら、オレはあの後も虎次郎と打てたのに……」

『それはたぶん、碁打ちを真剣に目指していた貴方に、私の力で碁打ちになることに対して罪悪感を感じていたんだと思います……そして、本当の好敵手だからこそ、私の力で打ちたくなかったのでしょう……本当にすまないことをした……大河殿の好敵手を奪ってしまったのだから……全ては私のせいです……』

進藤は佐為の言葉をオレに伝えてくれた。
そして、納得した。
あぁ、あいつって真面目な奴だったからなぁ……
……でも、それでも、オレはすごく悲しいんだ……

オレは静かに涙を流し始めた。
進藤は大慌てだ。
何しろ、小学校ではガキ大将のようなオレ……
こんな風にオレが泣くなんて想像したこともなかったんだろう。
というか、泣いたのなんて、何年……いや、何十年ぶりか？まぁ、赤ん坊の時は泣いてたんだろーけどな。

それから数分後、オレはやっと落ち着きだした。
進藤を見ると、あからさまにホッとしている。

「なぁ、佐為……オレはもう気にしねぇよ。それが、虎次郎の選んだ道だったんだからな。だけど、オレの好敵手を奪ったんだ。責任とって、これからお前がオレと碁を打てよ！」

『!?……えぇ、もちろんです!!』

「佐為がもちろんだってさ!……というか、大河って、何で江戸時代にいたんだ?」

進藤が不思議そうに問う。

ああそういえば、オレは質問ばっかして、オレのことなんにも話してなかったな。

「あー…それなんだけどな、なんかオレ前世の記憶を持ってるみたいなんだ。ちっちぇ頃には無かったんだけどな、だんだんと思い出してきたんだよ。」

「へぇー……不思議なこともあるんだなぁー……」

「いや、お前に取り憑いている佐為もなかなか不思議だと思うがな。」

「そりゃーそうだ!」

オレ達は向かい合って笑い合う。

秘密を共有することで、ずっと昔からの友達のように感じる。

「よーっし!佐為、今から打つぞ!!」

「あー……オレん家、碁盤ねぇよ……」

「んじゃ、オレん家行くぞ!!」

オレは進藤の返事を聞かずに部屋を飛び出す。

その時のオレは
なんだか清々しい気分だった。

5　懐かしの「碁」？（前書き）

あー……

こんな駄文を投稿していいのだろうか……

この作品は、はっきり言って、自己満足でしかないですよね……

とりあえず、更新です。

5　懐かしの「碁」？

あの日からオレは進藤とよく行動するようになった。
クラスの奴らは、いきなり一緒に行動しだしたオレ達を最初は不思議そうに見ていたが、今ではもう慣れたようで、一緒に行動していても、不自然には思われていない。
その過程で藤崎ともまぁまぁ仲良くなることができた。
藤崎と進藤は見ていてもどかしい……
どう見ても両思いだろ！
って言いたくなる。
まぁ、進藤に関しては無自覚のようだかな……
……そのうち、くっつくだろう。

「大河ー！今からお前ん家行っていい？……あいつが、打ちたい打ちたい煩いんだ……。」

噂をすると、その張本人、進藤がこっちに向かって走ってきた。
いかにも疲れました……って顔をしながら……
佐為にしつこく言われたのだろう……

「あぁいいぞ。行くか！」

オレはワクワクしている。
佐為と打つ碁は楽しい。
勝ったことがないってことが悔しいがな……

オレと進藤は他愛もない話をしながらオレの家へと向かう。
いや進藤が佐為の言葉を通訳しながらなので、三人かな。
オレの家はそんなに遠くないので、あっという間に着いた。

今日も兄は家にいない。
なんでか知らないが、進藤が家に来る時、いつも兄は家にいない。
不思議だ……

「早く打って、次はオレと打ってくれよ！オレ強くなりたいんだ！！」

「あぁ、いいぞ。」

と言っても、指導碁だがな……
今の進藤の実力じゃぁ、まともな対局はできない。
だが、成長スピードがすごく早く感じる……
ついつい色々教えたくなるんだ。

まぁ、最初に佐為とだ。
オレは碁盤と碁石を準備する。
オレと進藤が碁盤の前に座り、

「「お願いします！」」

と挨拶をする。
進藤が石を握る。
オレは黒になった。

「……ありません。」

「「ありがとうございました！」」

そう言い終わったあと、オレと進藤は一斉に体制を崩す。
特に、進藤は正座に慣れていないようで、床にでれーんと倒れている。

「あーもう、また負けたっっ！強すぎるぜ、佐為！！」

オレは進藤の斜め後ろを見ながら言う。
たぶん、そこに佐為がいるからだ。

『いえ、貴方も凄く強いですよ……しかも、どんどん強くなっている……』

「佐為が大河も強いってさ！しかもどんどん強くなっているって！！」

嬉しい……
オレよりも数段上の実力の人からそう言われるのは……
でも……

「とはいっても、佐為には全く近づけてねーけどな……うーん……オレはもっと強くなんなきゃなぁー」

「そっかぁー……それじゃ、次オレと打とう！！」

進藤が顔を輝かせながら言う。
純粋に碁を打ちたいって気持ちがダイレクトに伝わってくる。

「あぁ、打とう！！」

それからオレと進藤は一局打った。
進藤はやっと碁の形になっているという感じだ。
でも、話を聞いた限り進藤自身が碁を打ったことはオレと以外ほとんどないようだ。
つまり、すごい進歩なのだ。
やはり、成長スピードがすごい……

「あっオレもう帰らなきゃ！ありがとな、大河！！」

「おーぅ、また打とうな！」

進藤は慌ただしく家へと帰って行った。
たぶん、門限が危なかったのだろう……

というか、オレ……
強くなりてーなぁ……
佐為と互角に打てるぐらいに……
こんな気持ちになんのいつぶりだろ……
佐為ぐらい強くなるためには、佐為以外の強い奴とも打たなきゃなんねぇ……

どうやったら打てるかな……
碁会場？
いや、本当に強い奴なんて限られている……
しかも、小学生のお小遣いじゃ、強い奴を見つける前に尽きてしまう……
他は……何か手があったっけ？

「ただいまー……大河、オレ、トイレ行くからパソコンの電源入れといて！オレ急いでんから！！」

どうやら、兄貴が帰って来たようだ。
たくっっ……人使いが荒えんだから……
オレはしぶしぶパソコンの電源を入れる。
うちのパソコン、立ち上がるのが遅いからな……

「おーサンキューサンキュー。まったく、危なかったぜ。約束の時間過ぎてしまうところだった。」

兄貴がやっとやって来た。
しかも、手にはお茶とお菓子……
人に任せておいて、それかよ……

「というか、約束って何なんだ？」

「あぁ、将棋を打つ約束さ。ネット将棋だよ、碁にもあんだろ？」

ネット碁！？
そうだ、その手があった！
ネット碁だったら金もかかんねぇし、いつまでだってやれるから、いつか絶対強い奴と打てる！！

最っ高の手じゃねーか！！

「兄貴っていつもどんくらいパソコン使う？」

「あ？オレはそんなに使わねーよ。たまに、将棋で使うぐれーだ。」

ナイスッッ兄貴！

オレが思いっきり使えるじゃん！！

「そーなんだ。んじゃ使い終わったらオレに声かけてよ。オレ、ネット碁やってみてぇし。」

「ふーん、分かった。というか、お前、最近よく碁を打つよな？どーいう心境の変化？」

そーいえば、そうだ。

オレは今世でそんなに碁に執着を見せていなかった。

碁を見るとあいつを思い出すから……

でも、今は……

「兄貴、知らなかったのかよ。オレ、碁が大好きなんだぜ！！」

この一言に尽きるな……

5　懐かしの「碁」？（後書き）

一応、この後の展開もある程度決まっていますが、続けるか悩む作品です……

とりあえず、書いてある分は投稿します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8812s/

あぁ、懐かしの友よ

2011年10月13日01時07分発行